

聴覚障害者が情報を入手して利用できるよう、さまざまな工夫や最新の技術を紹介する「情報アクセシビリティ・フォーラム」が 11 月 22～24 日に東京・秋葉原で開かれた。全日本ろうあ連盟の主催で、初の企画に全国から 3 日間で延べ 1 万 3,236 人が集まった。

アクセシビリティとは、近付きやすさや道具の使いやすさを意味する言葉で、障害者権利条約でも強調されている考え方。フォーラムでは、手話の普及と情報のスムーズな取得をアピールした。

電機メーカーや福祉機器、通信ソフトの販売企業など 34 社・団体・機関が出展した展示エリアは、「わあ、これは便利」などと大盛況だった。

タブレット型端末やスマートフォンを持つ人は多く、これにアプリを入れて活用する方法を紹介したブースは特ににぎわった。

例えば、(株)プラスヴォイス企画・シヤムロックレコード(株)開発の「UD 手書き」は、画面に手書きする、話し言葉を音声認識で文字に換える、という簡単な操作を選びコミュニケーションできる。筆記具

を持たないぶん空いた手で手話を交えることもでき、勝手が良いという。

こうした機能を応用して、聞こえる人と聞こえない人が一堂に会し、それぞれの端末を無線で接続することで会議もできる。

このほか映像エリアでは、日本語字幕を付けたバリアフリー映画などを上映。会議エリアでは、研究報告や海外の先進事例なども紹介された。また、通訳者を介して話せる電話リレーサービスの体験コーナーなどにも次々に人が訪れた。

レポートの一つ「すべての人にコミュニケーションを保障する政策の推進」では、山田肇・東洋大教授が講演。

「配慮に欠けた製品があふれている状況を変えるには、配慮したものでないと政府が購入しない『公共調達』の義務化を導入することだ。そうすれば企業は開発の努力をするし、高齢者や障害者にも使えるものが普及する。障害者差別解消法が制定されたことは希望の光」などと語った。

(福祉新聞・第 2648 号 2013 年 12 月 9 日)